

中世の生活道具

市内の中世遺跡から出土する遺物には、土器・陶磁器、石製品、鉄製品があります。これらの出土品から、当時のくらしの様子をうかがうことができます。

生活道具で最も多く見つかったのは、土器・陶磁器で、食膳具・貯蔵具・調理具等に使われます。

土器は、手づくね製の素焼きの小皿で、宴席やお供えなどに使用しました。

貯蔵や調理用の甕・壺・すり鉢は、珠洲焼・加賀焼・越前焼といった国産陶器を採用し、近隣地の窯場から運ばれました。茶碗や皿などの食器類は、東海地方で焼かれた瀬戸焼、中国製品の青磁や白磁など、国内外の陶磁器を取り入れました。

中世後半には、喫茶^{きっさ}の風習が、武士階級だけでなく、一般農民層にまで及んでいきます。各遺跡からは、天目茶碗^{てんもくちゃわん}や茶入^{ちゃいれ}などの茶陶^{ちゃとう}や、茶道には欠かせない香炉^{こうろ}や花瓶^{けびょう}等、座敷飾^{ざしきかざ}りの品物も見つかっています。

石製品では、砥石^{といし}、炉縁石^{ろぶちいし}、行火^{あんか}が多く出土します。砥石は、刃物類の保守・調整に使われる道具で、石の粒子の違いによって、仕上砥石^{しあげといし}・中砥石^{なかといし}・荒砥石^{あらといし}の3種類に分かれます。市内の遺跡からは、仕上砥石と中砥石が多く見られます。

仕上砥石は、石の粒子が細かく、刀などの刃物研ぎに使われます。中砥石は、仕上砥石よりも粒子が荒めで、農耕具など日常用品を研ぐときに使用します。

炉縁石は、囲炉裏^{いろり}のふちに取り付ける石枠^{わく}です。石材は凝灰岩^{ぎょうかいがん}で、近隣の山から採取してきたものです。

行火は、石製の移動式暖房具です。石材は凝灰岩製で、くり抜いた石の中に炭^{たん}を入れて暖をとります。

鉄製品については、鋤^{くわ}・鋤^{すき}などの農具、食料の煮炊^{に た}きなどに使われた鍋^{なべ}や、武器である小刀^{こがたな}など多種多様な製品が見つかっています。